

宮沢賢治の文語詩

「霜枯れのトマトの気根」をめぐって

吉田文憲

賢治晩年の文語詩（未定稿）のなかに、「霜枯れのトマトの気根」という、つぎのような作品があります。

霜枯れのトマトの気根

その熟せぬ青き実をとり

手に裂かばさびしきにはひ

ほのぼのとそらにのぼりて

翔け行くは二価アルコホール

落ちくるは黒雲のひら

詩のおおよその意味は霜枯れして熟せぬ青いトマトの実を手にとってむしり裂くと「さびしきにはひ」が「ほのぼのとそらにのぼりていった、というのです。この詩がいつ書

かれたかという問題がひとつありますが、この詩の背景として、賢治の羅須地人協会時代の苦難に満ちた農業実践を考えれば、この「手に裂かば」には、彼の激しい、そしてやり場のない、突発的な憤怒のようなものが感じられます。原子朗氏によると、この「気根」には、仏教で言う「機根」に通じる意味もあるだろうとのことです。仏教でいう「機根」には、衆生にもともとそなわっている「氣」の力のようなもの、根源的な生命力が、仏の教化によって内側から湧き出す、発動する、といった意味がありますから、ここには、

そのような「氣」が、引き裂かれた青いトマトのおいととも空にむかっているのぼってゆく（アルコホールは気化しやすいものですか

ら）、といったイメージもあるでしょう。でも、ここで大切なのはこのトマトの根はまだ「氣」、すなわち生命力があり、死んではない、ということ。霜枯れて、ほとんど死にかけてはいるけれども、まだ「氣」が残っている。だからまた温めて、水を与えてやれば、そのトマトは生命を蘇らせるかもしれない。「気根」という一語には、そんな作者の念い、願いがあるのではないのでしょうか。ところで、この詩の五、六行目は、

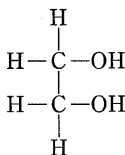
翔け行くは二価アルコホール
落ちくるは黒雲のひら

となっています。

最初よんだときは、この二行、とりわけ

「翔け行くは二価アルコール」の一行が私にはよくわかりませんでした。なにか根を凍らせないために使った肥料のアルコール分が気化して空にのぼってゆくのだとも思いました。ところが「宮沢賢治語彙辞典」でこの「二価アルコール」の説明を読んだとき、私はとても強い衝撃を受けました。ああ賢治はこんなことを考えていたのか、そして賢治作品を読むとはこういうところからはじめるべきではないのか、とさえ思いました。そしてこのことがキッカケとなつて、それまで読んできた賢治作品にたいする理解というか、作品読解の視野がここでいっぺんに開けたように思いました。

『宮沢賢治語彙辞典』は、この「二価アルコール」について、



という構造式をかかげながら、つぎのように説明をしていたのです。

文語詩「霜枯れのトマトの気根」に

「ほのぼのと空にのぼりて／翔け行くは二価アルコール」とある。(これは)

アルコールの軽さもあるが、鳥の群れ飛ぶ姿を二価アルコールの代表的な一種であるエチレングリコール構造式にたとえている。

すなわち、この「翔け行くは二価アルコール」という、文字の意味だけを追いかけていただけではなんのことだかよくわからない詩句は、「二価アルコール」の一種エチレングリコールの構造式を書いてみると、それは鳥の群れ飛ぶ姿、あるいは鳥が翼をひろげて飛んでゆく姿である、というのです。

宮沢賢治の世界は広い意味で今世紀初頭の進化論をベースにしています。その進化論によれば「鳥」は爬虫類から進化したものとされています。たとえば『春と修羅』第一集の詩「白い鳥」では、死んだ妹トシの化身した姿として「二足の大きな白い鳥」が描かれています。また、晩年の、「疾中」詩篇には「胸はいま」と仮題された、つぎのような詩があります。

胸はいま

熱くかなしい鹹湖であつて

岸にはじつに二百里の

まつ黒な鱗木類の林がつづく

そしていつたいたわたくしは

爬虫がどれか鳥のかたちにかはるまで

じつとうごかす

寝てゐなければならぬのか

ここには、爬虫類が出現したとされるジュラ紀や石炭紀のシダ類など巨大な鱗木類のなかでその爬虫類から鳥類へと進化するまで何万年も何十年もじつと地中に横たわっていなければならぬとする賢治の地質学的な想像力、病いの床での狂おしい妄想とも脅えとも不安ともつかない気持ちになまなましく映し出されています。ともあれ「鳥」は宮沢賢治にとっては修羅的なものからの救い、あるいは浄化のイメージなのです。

文語詩「霜枯れのトマトの気根」においても、鳥が飛ぶ姿に図像化された二価アルコールの構造式は、その図像において、やはり、死にかけているトマトの「熟れぬ青き実」の浄化、再生のイメージを語っているのではな

いでしょうか。そして、これはおそらくあの詩篇『春と修羅』の（このからだそらのみちんにちらばれ）」と同じ叫び声なのです。それが分子式にしなければわからないようなかたちで表現されているところに私は賢治のイタズラ心、機知、ユーモアのようなものを感じます。と同時に、そこにはやはり冒頭でも述べたような賢治の羅須地人協会などの農業実践を通過した岩手の厳しい風土に生きる農民としての彼のこの時期の激しい念い、祈りのようなものがうかがわれるのではないでしょうか。

というのも、この詩は「翔け行くは二価アルコホール」のあとに、さらに、

落ちくるは黒雲のひら

という一行がつづきます。

なぜこの詩の最後の一行は「落ちくるは黒雲のひら」なのか。

鳥が飛翔する、アルコールが気化する、この飛翔、気化は科学的にみればものが燃焼する、燃焼のイメージでもあるのです。ものが燃焼するということは酸素などの酸化剤と他の分子が化学反応を起こすことです。この意

味では腐蝕や腐敗も一種の燃焼です。そして燃焼の結果そこに新たな物質変換やエネルギー変換が起こるわけです。ここでは二価アルコールという液体が気化する、燃焼することによって蒸発する。それをさきのエチレンジリコールの構造式に還元すれば、イメージとしてはC（炭素）とO（酸素）が反応して黒雲が湧き出し、そこからH₂O（水）、すなわち雨が降ってくるということになります。この詩行は、この構造式の化学変化も語っているのです。

すると、この「落ちくるは黒雲のひら」は鳥のかたちに姿を変えた二価アルコールが気化し、燃焼して、黒雲に変化し、そこからはやがて激しく雨が降ってくる——そういう賢治の念い、祈り、相転移をくり返すダイナミックな物質変換のイメージを描いていることにもなるのです。まさにこの一行は化学構造式の反応の結果導き出される一行でもあるのです。ですから、ここには、浄化、再生のイメージとしての「鳥」が分子式に還元されたところから気化し、やがて激しい「雨」となっており落ちてくるという、液体—気体—液体という物質の相転移のなかでの浄化、再生のイメージがあるといってもいいでしょう。

空から雨が降り落ちてくると、どうなるか。むろんトマトの「氣根」は水を得て、再び生命を蘇らせることになる。そのためにもこの「氣根」は霜枯れて仮死状態ではあっても、死んでいてはいけない。根に「氣」が残っていなければいけない。そのことが前提となっていて、はじめて「翔け行くは二価アルコホール／落ちくるは黒雲のひら」の二行は、そこに浄化の、そして再生のイメージを結ぶことになるのでしょう。

けれども、そんなことも、二価アルコールの分子構造式を知らなければ読み解けない、あるいは見えてこない世界でもあるのです。ここには宮沢賢治の全く新しい読み方、世界の見え方を促すなにかとても大きなモメントがあるように思います。賢治作品を言葉の化学変化のなかで読んでみる——あの有名な詩篇「春と修羅」などもそのように読んでみてはじめて見えてくる世界でもあるのです。ちなみに「春と修羅」の最後の一行は、

雲の火ばなは降りそそぐ

です。これは、この詩の「落ちくるは黒雲のひら」に対応しているのです。